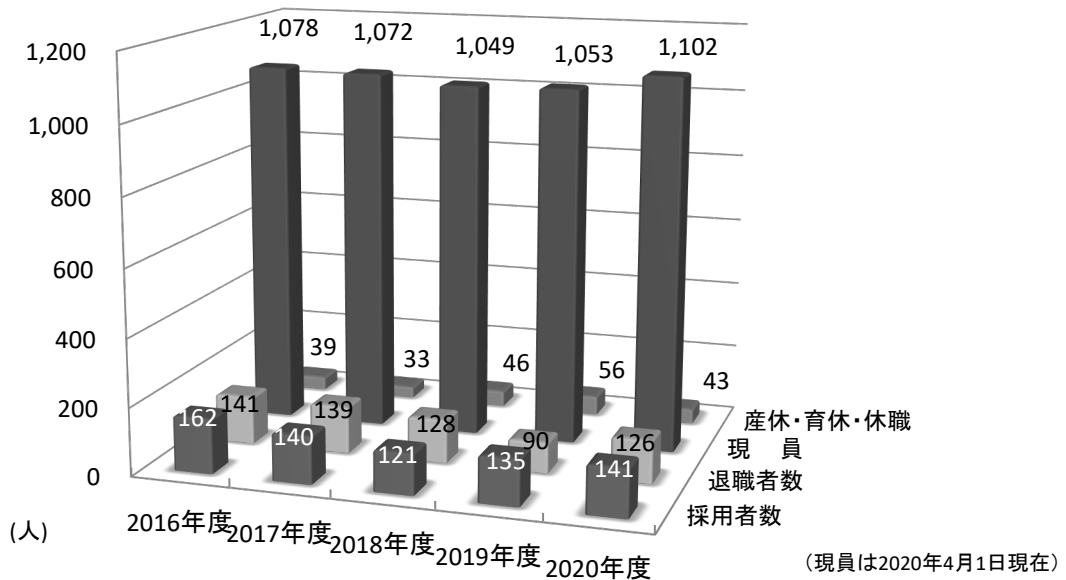


34 看護部

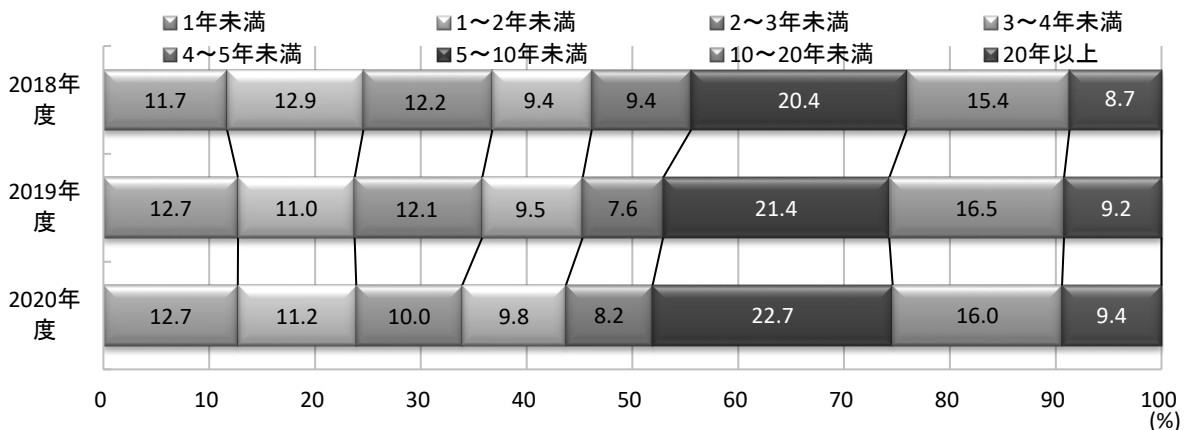


看護部は“SWEET”【S(sincerity)：誠実な行動、W(warm)：あたたかい対応、E(evidence)：根拠ある実践、E(ethics)：倫理的感性、T(technique)：確かな技術】をモットーに、看護職員一人ひとりが自己の役割と責任を果たすべく看護業務に取り組んでいる。看護職員の確保・定着に努めることで在職者の平均勤務年数も年々増え、産休・育休を取得して働き続ける職員も多い。(図34-1, 34-2)。重症度、医療・看護必要度において、A項目は急性期医療・処置(ME機器の装着、管理、モニタリング等)を、B項目は患者の生活支援状況(動作制限や認知度による介助等)を、C項目は手術等の医学的状況を評価している(図34-3, 34-4)。患者の観察度、自由度(図34-5, 34-6)からは重症患者が年々増加してきているものの、依然として全病棟で常にB項目の点数が高く、日常生活援助に多くの看護力を費やしている状況である。特定機能病院の7対1入院基本料の施設基準である「重症度、医療・看護必要度Ⅱ」の判定基準28%以上を維持するためには、医療処置を必要とする患者の増加への取り組み、また、生活支援が主たる患者の早期退院(在宅・転院)が必須となる。入院前、入院時から退院支援に取り組み、当院での医療処置が終了した患者がスムーズに退院できるよう、医師、メディカルスタッフをはじめ、地域の医療関係者との連携を強化していく。さらに在院日数の短縮により、医療処置・ケアニーズの高い患者が外来へとシフトしていることから、在宅療養指導や看護外来の充実を図り、患者支援強化に向けた取り組みを継続している(表34-7)。今後も入院前から退院に向け、積極的に介入し、継続看護の更なる質向上を目指す。

34-1 看護師数の年度別推移



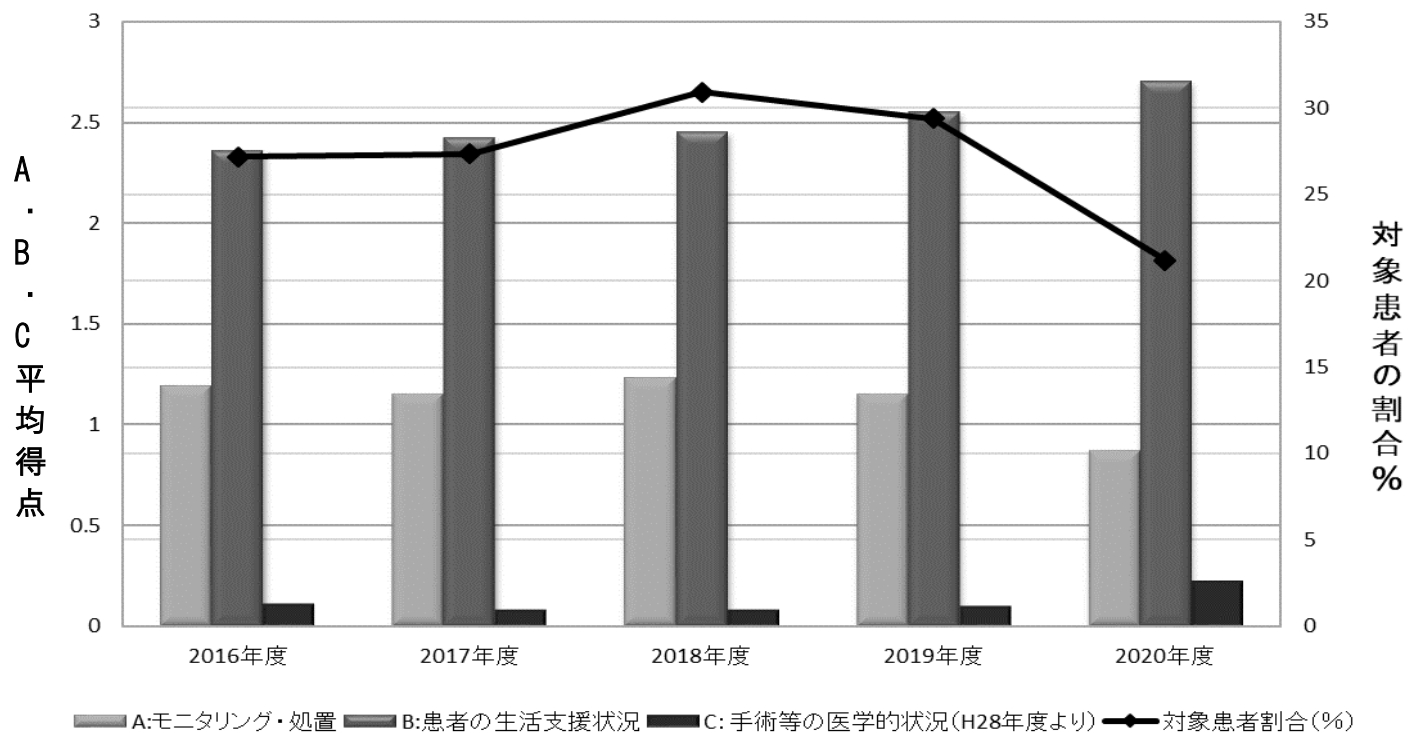
34-2 看護師当院在職年数別の年度別構成比率(各年度4月1日現在)



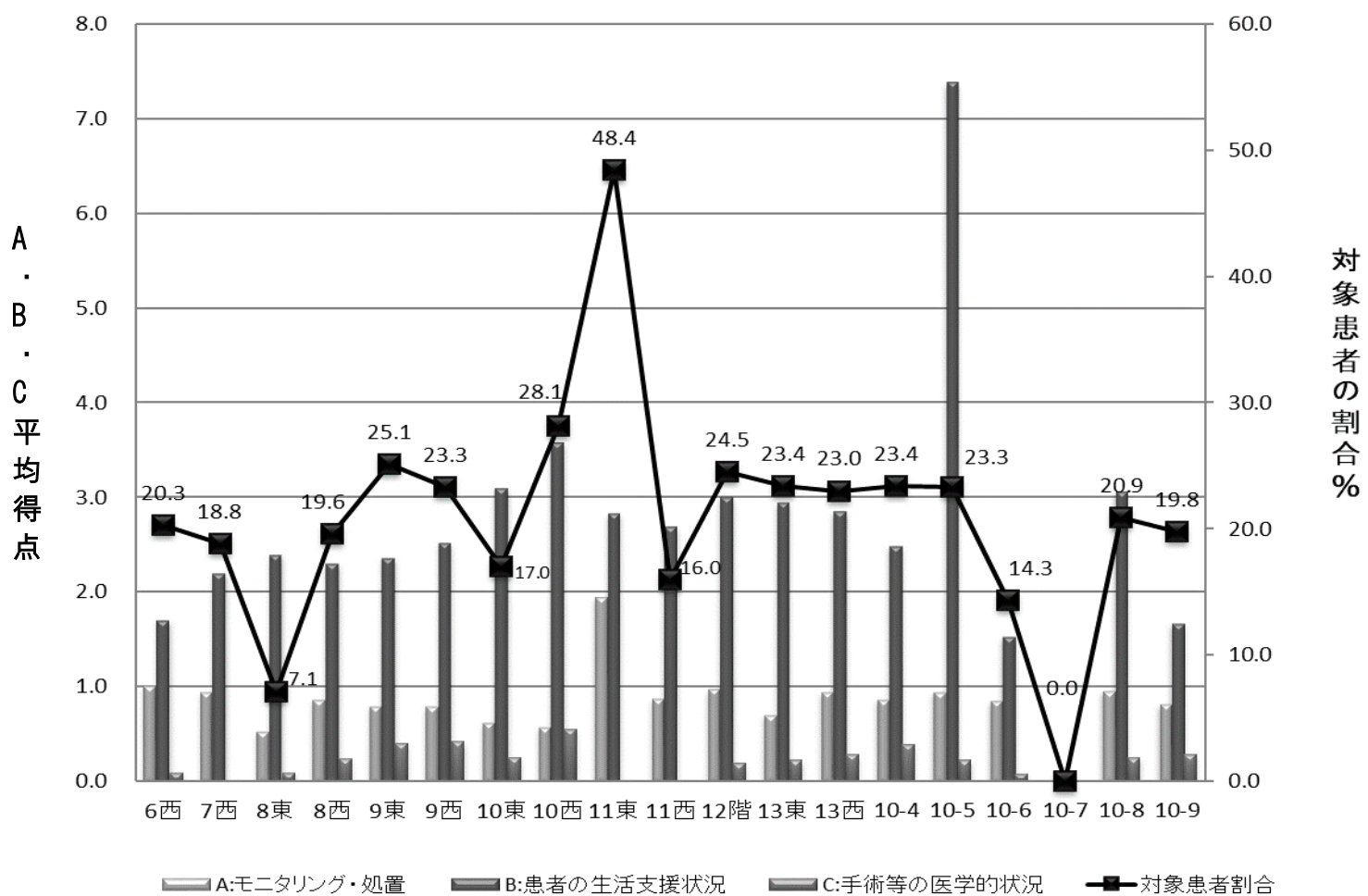
34-3 7対1対象病棟における重症度、医療・看護必要度平均得点の年度推移

対象患者 ・ A得点2点以上かつB得点3点以上
 ・ A得点3点以上
 ・ C得点1点以上

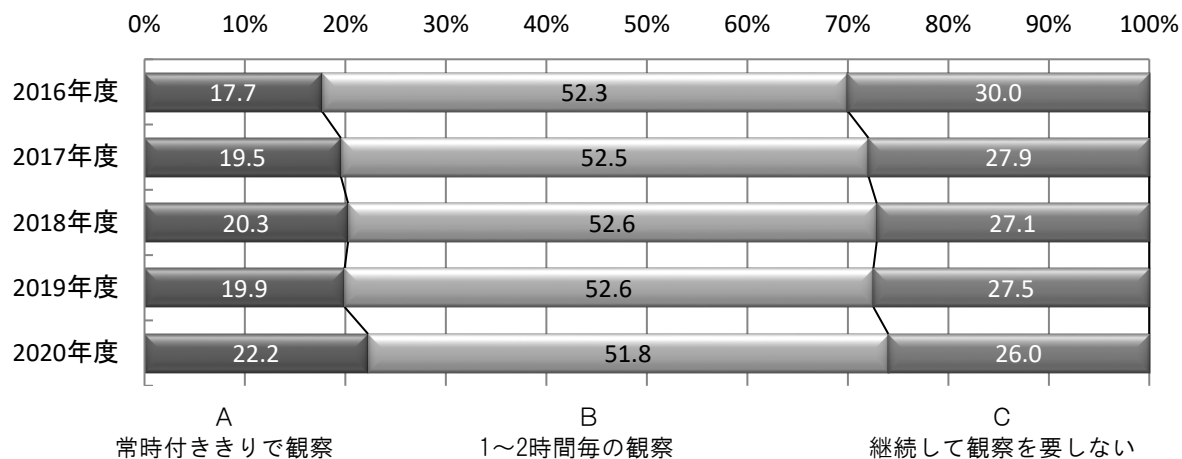
※2016年度診療報酬改定により項目の変更、C項目の追加あり。
 ※2018年度診療報酬改定により項目の変更、対象患者の基準の変更あり。
 ※2020年度診療報酬改定により、C項目の算定日数の変更あり。



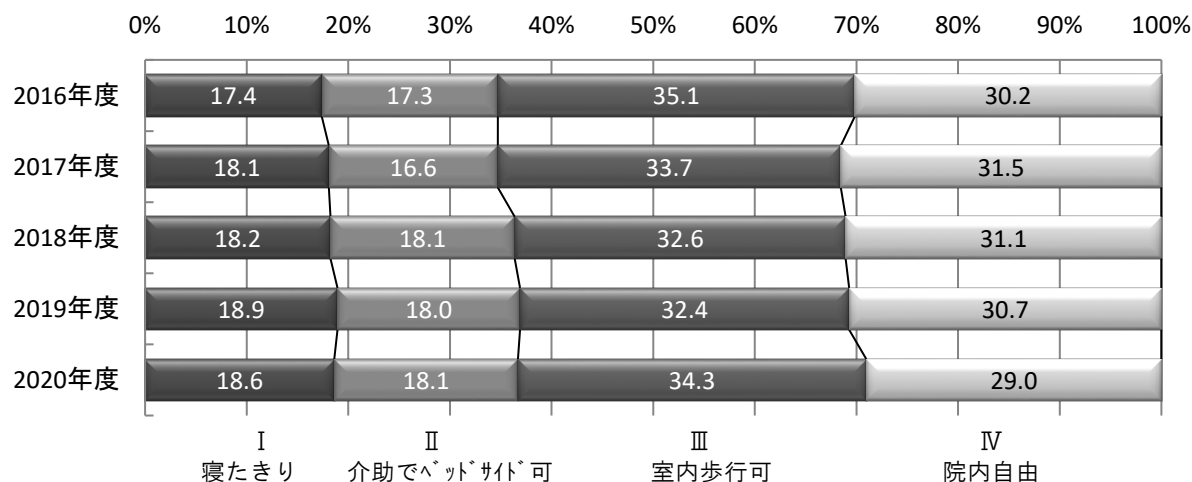
34-4 2020年度 7対1対象病棟別重症度、医療・看護必要度 項目別平均得点および対象患者割合



34-5 看護観察度別患者数の年度別構成比率（全病棟）



34-6 生活の自由度別患者数の年度別構成比率（全病棟）



34-7 年度別外来看護活動状況

(件)

区分		2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
療養指導	在宅療養		692	2,337	3,922	5,704
	自己注射	803	1,071	1,128	1,088	939
	自己腹膜灌流	11	3	9	5	11
	酸素療法	155	147	110	73	44
	人工呼吸		13	96	177	175
	中心静脈栄養	5	16	51	55	64
	成分栄養経管栄養	14	454	203	63	86
	自己導尿	60	80	51	49	71
	糖尿病透析予防		302	144	163	111
	がん化学療法		33	75	59	76
看護外来	造血幹細胞移植看護		96	225	586	523
	不妊症看護	-	-	-	76	82
	フットケア	497	595	715	749	540
	糖尿病看護		454	464	453	333
	慢性病看護		257	228	526	370
	こども看護		13	51	11	122
	がん看護		589	944	191	871
	周術期看護		124	132	91	89
	リンパ浮腫	116	219	163	205	157
	ストマケア	955	1,125	1,030	1,072	932
	母乳外来	138	164	92	100	96
	マタニティヨガ	78	82	38	51	2
合計		3,056	7,397	8,287	9,765	11,398

※2017年度より表記方法変更

※2019年度より不妊症看護の項目を追加